

五十九期

(士59期
経8期)

担当者
二世
神保 明生

私と写真

湯澤典男 (29) / 3・通信

仙幼時代、訓練旅行で蛇腹のカメラ、
パーレットを渡され千早城など撮影した

のがカメラとの初めての出会いだった。その後生徒徒監に印画紙の現像まで教えられた。今でも我が家に暗室は残っているがすでに物置小屋になっている。戦後からカメラ歴は長く黒い冠布を頭から被って撮る大型のフィルムカメラからデジカメ等書齋の一隅を占拠している。専ら花の接写や風景写真を撮っていたが野鳥撮影の歴史は意外と浅く、のめり込み始めたのは数年前。望遠レンズの底なし沼に陥まり通称ハチゴロウ(800mm/F5.6)のレンズまで買ってしまふ。当然鳥撮影が楽しくなる。しかし体力の衰えには逆らえず今では重機並みのカメラは息子に持たせ、こちらは軽機級のカメラで対応している。

私にとって今まで鳥撮影の中で感動した瞬間は何度もあったが、その中でも更に強烈に脳裏に焼き付いている光景がある。前もって重い機材は船便で送る。また、初めての土地に行く時は専門のガイドを利用する。ある年の5月息子夫婦と石垣島に行き馴染みのガイドとアカシヨウビンを撮影した時の事である。薄暗い林の中でアカシヨウビン独特のヒューヒョロロと云う鳴き声が聞こえる。静かにしているとやがて目の前の木の枝に姿を見せる。まるで朱色の宝石だ。機関銃のように連写モードでシャッターを押し続ける。満足する位撮影してからガイドが幸運なら出遭えるかもしれないと場所

を変えた。そこで見たアカシヨウビンはまだら模様で非常に珍しい貴重な個体らしいが一瞬夢か幻か天国に居るのではないかと思う程の美しさで、しかも間近に思う存分見てくれと云ってるように暫くじっと動かず枝に止まっててくれた。僥倖とは正にこういう事かと暫く興奮した気持ちは落ち着かなかつた。(続く)
左の写真はノゴマです。

